

介護老人福祉施設に入居する要介護高齢者に対する 看護学生の援助過程における着眼点

Student Opinions of Nursing Care for the Elderly Those Requiring Home Care

井上美代江¹⁾*, 太田節子¹⁾

Miyoe Inoue, Setsuko Ota

キーワード 介護老人福祉施設, 要介護高齢者, 看護学生, 援助過程, 着眼点, 質的研究

Key Words nursing home for the elderly, the elderly for in need of nursing care, nursing students, processes of assistance, the opinions of nursing, qualitative study

抄 録

背景 看護基礎教育カリキュラムの改正が行われ、老年看護学では、学生が高齢者及びその生活機能を理解し、高齢者への看護実践能力を高める指導が求められている。そこで、学生が高齢者と関わる時間や生活援助の機会が多いと思われる生活の場としての「介護老人福祉施設」で、学生が高齢者と関わる過程を分析することで、実習指導の示唆を得たいと考えた。

目的 介護老人福祉施設における老年看護学実習で、学生の要介護高齢者への援助過程における着眼点を明らかにする。
方法 研究デザインは、質的帰納的研究である。対象は、研究に同意の得られた介護老人福祉施設で老年看護学実習を行った学生6（男子1）名である。データ収集は、高齢者に関わる学生を参加観察（観察者として）し、実習終了後に半構成質問紙による面接を行った。分析は、参加観察と面接および学生の実習記録を統合して行った。

結果 得られたデータは、学生6名が高齢者8名に関わった38場面であった。実習経過では、初日の学生は、高齢者との関わりに戸惑い、その関わりを模索していた。3日目は、記録や教職員の助言等を参考に、高齢者の看護ニーズを把握し援助した。最終日は、学生が主体的に高齢者の自立を支援した。これらの援助過程には、学生が高齢者への援助の関わりに着目した視点があり、その類型を分類したところ、1) 高齢者の残存機能に働きかける、2) 高齢者との人間関係を重視する、3) 高齢者の生活行動を重視する、4) 高齢者の健康的な反応を引き出す、5) 高齢者の感情を重視する、の5類型が抽出された。

結論 学生が高齢者を援助する着眼点は、5類型が認められた。指導者は、抽出された学生の高齢者への援助の類型を活用して、教育的支援を行うことが重要と考える。

Abstract

Background Following revisions of the curricula for basic nursing education, students in geriatric nursing receive instruction on understanding elderly individuals and their daily functioning, and enhancing their nursing skills when working with them. And we sought to determine which suggestions are necessary for practicum instruction by analyzing the processes of students when interacting with elderly care recipients at a nursing home in geriatric nursing practicum.

Purpose To explore the opinions of nursing of students interacting with elderly care recipients at a nursing home in a geriatric nursing practicum.

Methods This study employed a qualitative and inductive study design. Participants were six students (one male) who consented to participate and who were completing their geriatric nursing practicum at a nursing home for the elderly. Data were collected through participatory observations of the students interacting with the elderly care recipients and semi-structured interviews after practicum completion. For analysis, we created transcripts by integrating materials from the observations, interviews, and practicum records.

Results/Discussion We obtained data from 38 scenes where the six students interacted with eight care recipients. In terms of processes, on the first day they tended to be confused and struggled in their interactions with the individuals. On Day 3, they were likely to look at records and seek advice from their instructors, and attempted to understand the nursing needs of the care recipients and assist them. On the final day of their practicum, the students were actively supporting the independence of the care recipients. In the processes of assistance, we extracted five categories of particular perspectives the students had while assisting the care recipients: (1) working on the care recipients' remaining functions, (2) emphasizing interpersonal relationships

¹⁾ 聖泉大学 看護学部 School of Nursing, Seisen University

*E-mail: inoue-m@seisen.ac.jp

with them, (3) emphasizing their daily living behaviors, (4) eliciting healthy reactions from them, and (5) valuing their feelings.

Conclusion There were five categories of the student opinions of nursing for elderly. We suggest that instructors utilize these categories in their provision of educational support.

I. 緒言

2009年、看護基礎教育カリキュラムは、看護学生（以後学生）の看護実践能力を強化する目的で改正が行われた。老年看護学は、特に生活機能の観点からアセスメントし、看護を展開する方法を指導することが示されている。教員は、学生が実習指導において、高齢者を理解し、高齢者に対して、看護実践能力を高める指導が求められる。

先行研究において、学生は、老年看護学実習において要介護高齢者（以後高齢者）と関わる機会が多い状況の中で、高齢者を理解し、良い関わりを持つことが困難であると報告されている（松田ら、2004、平木ら、2008、宮地ら、2005、田中ら、2005）。

学生は、学内の学習において、ビデオ視聴等で認知症高齢者を理解している。しかし、学生は、高齢者と関わるのが日常的に少ない。そのため、実習では、認知症を含む要介護高齢者に対し、実習初日に、高齢者との関わりに戸惑いや困難感を訴えていた。その一方で筆者は、実習経過とともに学生が、高齢者に対して、その場に応じた対応ができるように成長することを経験してきた。そこで、学生がどのようにして高齢者を理解し、看護援助に関わっていくのかという過程に関心を持った。先行研究は、老年看護学実習における学生と高齢者との関わりについて、実習中の学生の記録や終了後のアンケート調査の分析や面接内容の分析は明らかにされていた。しかし、学生の観察の視点や無意識の行動は検討されていなかった。そのため、学生がどのように高齢者を理解し、どのような着眼点を持ち、援助関係を形成していくのかを明らかにしたいと考えた。

そこで、本研究では、学生が高齢者と関わる上で、比較的時間があがり、観察し易いと思われる生活の場としての「介護老人福祉施設」における、学生の高齢者と関わる援助過程を分析することで、実習指導の示唆が得られると考えた。

II. 研究目的

本研究の目的は、介護老人福祉施設における老年看護学実習で、学生の高齢者への援助過程における着眼点を明らかにすることである。

III. 実習の概要

本研究の実習概要は次の通りである。

1. 実習の目的

目的は、既習の知識・技術・態度を統合し、高齢者への看護の実践を通して基礎的臨床能力を身につけることとする。

2. 実習施設と指導体制

実習施設は、A県の介護老人福祉施設（以下施設）で、ケア体制は固定型ユニットケアである。ユニットには、18名の高齢者が入居していた。そして、高齢者の介護度は、3～4が多かった。

指導体制は、担当教員（以後教員）が実習開始の前週に実習オリエンテーションを行う。教員は、5日間の実習期間中、初日、4日目、最終日（5日目）に施設において指導を行う。施設指導者は、介護課長が指導の管理を行い、ケアワーカー（以下CW）が日々の食事、排泄、移動等のケアの指導を行った。また、施設の指導方針の1つとして、学生の気づきを高めるため、学生は最初に高齢者のケアプランを閲覧して関わるのではなく、CWから高齢者の説明を受けて日常生活援助を実施した。学生は、受け持ちの高齢者を決めないで、ユニット内で自由に複数の高齢者と関わっていた。

IV. 研究方法

1. 用語の操作的定義

1) 要介護高齢者

介護保険法による要介護認定基準で、要介護度1～5に認定され、介護老人福祉施設に入居して介護サービスを受けている者である。本研究では、第1号被保険者のみとする。

2) 援助過程

学生が高齢者に必要な援助を行うために、高齢者との関わりやつながりを持つ一連の看護援助の道筋とする。

2. 研究デザインと研究方法

研究デザインは、質的帰納的研究方法で、参加観察法と半構成的面接法を採用した。

3. 研究対象

B大学の看護系の4年生の学生のうち、老年看護学実習（1単位）の実習生で、本研究に同意を得た学生6名（女子5名、男子1名）である。

4. 研究対象の学生が実習期間に関わった高齢者の概要（表1）

学生が、実習期間に関わった高齢者のうち、研究協力に同意が得られたのは、男性1名、女性7名の計8名であった。高齢者の年齢は、75～91歳（平均83.1歳）であった。要介護度は3～4度であった。高齢者の認知機能は、施設からの情報によると、改定長谷川式簡易知能評価スケール（HDS-R）において重度が3名、中等度が4名であり、1名については入所時期の都合で不明であった。

5. データ収集期間

平成21年6月1日～7月17日

6. データの収集方法

1) 参加観察法

研究者は、本研究において、観察者として参加観察を行った。また、施設に依頼して、学生の実習開始までに観察場所となるユニットでスタッフ

と一緒にケアに参加し、事前に高齢者に会っていた。学生の5日間の実習期間中に、研究者の同席による学生や高齢者への負担を考慮し、観察の場所と時間帯および場面を選択した。観察場所は、食堂兼デイルームとし、観察する時間帯は、初日・3日目・最終日（5日目）の9時から昼食介助が終了するまでとした。観察場面は、学生と高齢者のコミュニケーション、食事介助、レクリエーション活動、教員や施設の実習指導者、CW、他の学生との関わり場面とした。ただし、高齢者のプライバシーに関する排泄や処置などの場面は外した。そして、観察の視点は、学生および高齢者の表情、会話、行動、学生の対応等とした。実習中の学生および高齢者の負担にならないように配慮して観察した。学生ひとりあたりの参加観察時間は、平均135分/日、最大183分、最小101分であった。

2) 面接法

研究者は、学生に対して、実習終了後に半構成的面接を行った。学生に参加観察で得たデータを確認してもらい、実習で高齢者に関わっていた時の学生の思考や判断を確認した。面接時間の平均は、62.5分、最大は90分、最小は35分であった。

3) 実習記録の閲覧

実習記録は、データの確認をするために学生の許可および実習指導者の許可を得て閲覧した。

7. データ分析と信頼性

データの分析過程（図1）においてデータは、初日、3日目、最終日の午前中に参加観察で得られたデータを経時的に観察ノートに整理した。また、最終日の面接で得られたデータは逐語録におこした。次に、学生ごとに参加観察した内容について逐語録からその時に学生がどのような事に視点

表1 研究対象者が関わる要介護高齢者の属性

高齢者	性別	年齢 (歳代)	入所期間 (年)	改訂長谷川式簡易 知能評価スケール	要介 護度	日常生活の状況 (食事・排泄・移動)
①	女	80	2	重度	4	部分介助, 車椅子使用
②	女	80	1	中等度	3	部分介助, 車椅子使用
③	男	80	3	重度	3	右片麻痺, 部分介助, 車椅子使用
④	女	90	3	中等度	3	部分介助, 車椅子使用
⑤	女	80	11	重度	3	右片麻痺, 部分介助, 車椅子使用
⑥	女	70	1	中等度	4	右片麻痺, 部分介助, 車椅子使用
⑦	女	80	3	不明	3	右片麻痺, 部分介助, 車椅子使用
⑧	女	80	11	中等度	3	右片麻痺, 部分介助, 車椅子使用

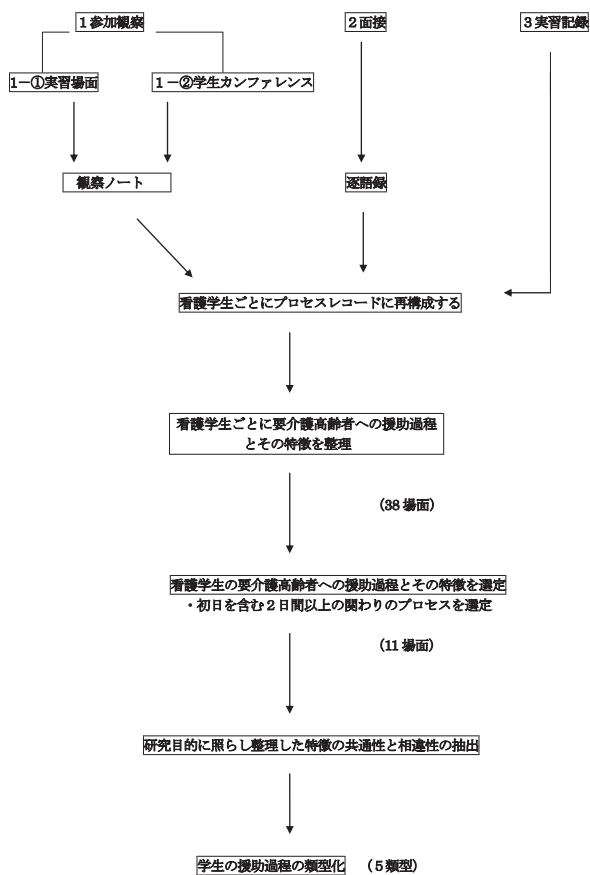


図1 データの分析過程

を置いて関わっていたのか、考えていたことや感じていた内容を加えて再構成した。また、不十分な所は実習記録から補足し、援助過程の特徴を明らかにした。さらに、学生が高齢者へ関わる際に、学生が着眼している関わりの視点の特徴を分類して類型化した。また分析過程は、質的研究のスーパーバイザーや看護師との検討会を行って内容の妥当性を確保した

8. 倫理的配慮

学生および施設管理者には、研究協力への任意性の保障、施設名や学生氏名の匿名性の厳守、プライバシーの厳守、データの厳密な管理や、データは研究以外に使用しない等、倫理的配慮を含む調査の説明を行い同時に書面にて同意を得た。その後、施設管理者から高齢者の紹介を得、実習開始前には研究者が施設研修を行い、高齢者に研究目的・方法等の説明を行い、研究参加を依頼し同意を得た。本研究は、平成21年3月3日に滋賀医科大学倫理委員会の承認を得た後に実施した(20-103)。

V. 結果

データは、学生6名が高齢者8名に関わった38場面から得られた。学生が、同一高齢者と2日以上関わった過程は11事例であった。(表2)

これらの援助過程には、学生が高齢者への関わりに着目した視点があり、その類型を抽出したところ、1) 高齢者の持てる力、2) 高齢者との人間関係、3) 高齢者の食生活行動、4) 高齢者の健康的な反応、5) 高齢者の感情の5類型が取り出された。以下、各類型を説明する。

1. 高齢者の持てる力

1) 学生Aの高齢者①氏(以後高齢者①)への援助過程

学生Aは、初日の食事介助場面において、CWから高齢者①は自分で摂取ができるので見守るように説明を受けた。しかし、食事場面における情報が少ないため状況がわからず介助の仕方に困難を感じていた。そして、返答がない高齢者①は、意志疎通ができない人かと思い、表情から意思を読み取ろうとした。しかし、学生Aは、昼食後の与薬時に教員の指導で、高齢者①に対して、名前の確認のため『お名前を言って下さい』と話しかけたところ、高齢者①は、小声で自分の氏名を正確に答えた。学生Aは、「それまで高齢者への対応がかみ合わず認知症で訳がわからないと思っていたが、先生(教員)の対応から、言葉で答えることができる」と認識した。3日目、学生Aは施設利用者の記録から情報収集を行い、高齢者①の入居時の様子、現在は認知症状が進んでいることやそれまでに得た情報で、正確なものとは違っていったものに気づきより理解を深めた。また、学生Aは、得た情報を活用し高齢者①の見当識障害、記銘力レベルを観察したいと考えた。最終日は前日のレクリエーション活動から、高齢者①が目的をもって行動できる存在であることがわかっていた。そのため、学生Aは、高齢者①がゆっくりとした動作ではあるが、自力で車いすを操作する状況を見て、上半身の動きに着目した。高齢者①が両上肢を使い、車いすを操作できるように言葉かけを工夫し、時間は要したがトイレまでの往復ができるように働きかけた。

表2 要介護高齢者に対して学生が着眼した11の場面（初日，3日目，最終日）とその類型

類 型	場 面	実習経過		
		初日	3日目	最終日
1)高齢者の持てる力	ア	・学生Aは、食事介助場面で、言語的コミュニケーションがとれないのであれば表情に着眼して意志を読み取ろうとした。	・学生Aは、高齢者①の入所時から現在に至る経過について着眼して施設の利用者記録を閲覧し対象理解を深めた。また、高齢者①の食事動作に着眼して介助した。	・レクリエーション活動から高齢者①が目的をもって行動できると理解した学生Aは、高齢者①の上身の動きに着眼し車椅子の自操を促した。
	イ	・学生Bは、高齢者②のコミュニケーション能力に着眼し、会話を中断しないで進めた。	・学生Bは、高齢者②の認知レベルに着眼し、言動と施設の利用者記録を統合して理解が深められた。	・学生Bは、控えめな高齢者②から自立しようという気持ちを引き出した。
	ウ	・学生Cは、自分自身のコミュニケーション能力に着眼し、無表情な高齢者③に対して自分を磨きたいと思い関わった。	・学生Cは、高齢者③のコミュニケーション能力に着眼し、楽しさを感じながら働きかけた。	・学生Cは、高齢者③に呼び止められた場面で、高齢者の長期記憶に着眼してコミュニケーションをとりながら一緒に探し発見した。
2)高齢者との人間関係	エ	・学生Aは、高齢者④の訴えと指導者の指導との板挟みで辛さを感じたが高齢者との人間関係に着眼し高齢者との人間関係成立を優先した。	・学生Aは、実習メンバーの高齢者④への対応に着眼し、観察した結果、自立を促す援助が理解でき、依存度が高い高齢者と円滑に関わることができた。	
3)高齢者の食生活行動	オ	・学生Dは、高齢者⑤の食事動作に着眼し、部分介助は受け入れられるが声かけが無表情な高齢者に戸惑いを感じ無言で介助した。	・学生Dは、高齢者⑤に対してCWの食事介助を観察しモデルにして援助に活用した。	
	カ	・学生Eは、高齢者⑥の食事動作に着眼し介助した。高齢者⑥の口へ運ぶタイミングがあわず高齢者の気分を害して困惑した。	・学生Eは、高齢者⑥の食事中の表情や動作に着眼して誤嚥や興奮状態なく介助ができた。	
	キ	・学生Bは、眠っている高齢者⑥の食事介助で高齢者の生活パターンが分からなかったので覚醒を促すことを中断した。	・学生Bは、散歩の場面から高齢者⑥は意志疎通が図れると理解出来ていたので、食事場面では高齢者の表情動作に着眼し誤嚥興奮状態なく介助した。	
	ク	・学生Cは、高齢者⑥の食事動作に着眼し介助したが、緊張して集中できず、興奮状態になった高齢者⑦に戸惑い、介助を中断した。		・学生Cは、高齢者⑥の食事介助で食事動作に着眼し観察しながら援助した結果、前日まで全介助だった高齢者⑥が自分で摂取したため見守りながら介助した。
4)高齢者の健康的な反応を引き出す関わり	ケ	・学生Fは、高齢者の言語的コミュニケーション能力に着眼し、コミュニケーションがとれる高齢者②と関わり情報収集したが会話が続かずに困った。		・学生Fは、高齢者との遊びに着目し高齢者②を誘い、高齢者②の健康的な精神活動を引き出した。さらに勝ちたいという人間的な活動を引き出した。
	コ	・学生Fは、高齢者の言語的コミュニケーション能力に着眼し、高齢者②と関わり、言葉が話せない高齢者⑦について情報収集した。		・学生Fは、高齢者⑦が言葉は話せないが理解力はあると分かっていたので遊びに着目し百人一首を行い、高齢者⑦の健康的な精神活動を引き出した。
5)高齢者の感情を重視	サ	・学生Eは、高齢者のコミュニケーション能力に着眼し、高齢者⑧と会話し傾聴したところ、高齢者⑧から若い頃の話を引き出すことができた。	・学生Eは、高齢者⑧とCWのやりとりを観察しながら、感情に着眼し、亡き夫との思い出のある自宅を売却することが高齢者⑧が精神的に落ち込んでいると問題視した。	・学生Eは、高齢者⑧の感情に着眼し、高齢者⑧が生産苑で生活する覚悟を迫られたと感じ声かけに困惑した。

2) 学生Bの高齢者②氏（以後高齢者②）への援助過程

学生Bは、初対面の高齢者②に対して認知症状を感じながらも会話を中断することなく進めた。3日目、CWに申し出て施設の記録から情報収集を行い、実際に高齢者②と関わり収集した情報と記録の情報を統合させ、認知レベルを観察した。最終日、学生Bは、レクリエーション活動で一緒に活けた花の色合いについて高齢者②を賞賛したところ高齢者から学生との協同作業だという相手への思いやりの気持ちを引き出した。また、いつも控えめな高齢者②が他的高齢者に対して、「今のままではいけない」や、「しっかりしよう」と叱咤激励しているのを傾聴することで、高齢者②が自分の今後のあり方について語り、自立しようという気持ちなどの精神・社会面の持てる力を引き出した。

3) 学生Cの高齢者③氏（以後高齢者③）への援助過程

学生Cは、初日に無表情で車椅子に座ったままあまり動かない高齢者③に近づき声かけをした。学生Cは、高齢者③に対して、何の反応もなく変

化もない人だと感じたが、自分のコミュニケーション技術を磨きたいと思い高齢者③に関わった。3日目、学生Cは頻回に高齢者③に話かけたので、高齢者③は徐々に学生Cの顔を覚えて高齢者③から声をかけることが増えた。最終日、学生Cは高齢者③に呼び止められた場面で、高齢者③の困った表情を感じ取り、父親から譲り受けた大切な時計を探しているのではないかと尋ねたところ「そうや!」と反応が返ってきた。学生Cは高齢者の長期記憶について持てる力に働きかけることができた。

2. 高齢者との人間関係

1) 学生Aの高齢者④氏（以後高齢者④）への援助過程

学生Aは、他的高齢者の食事介助の準備時に矢継ぎ早に訴える高齢者④に呼び止められた。高齢者④は、数日前まで膝関節の骨折で移動や移送の介助を受けていたが、再び自分で車椅子を使用して移動できる程に回復していた。学生Aは事前にCWから、高齢者④ができることは本人にってもらうように説明を受けていた。しかし、高齢者④に呼ばれるとすぐに車椅子移送の介助を行った。

一見、学生Aは、初日の慣れない環境で緊張のためにCWが説明した施設のケア方針と違う関わりを行ったように見えた。学生Aは、高齢者④の訴えとCWの説明との板ばさみに戸惑い、どう関わるか悩んだ末、初対面の学生が高齢者に関わることは、信頼関係が築けているCWの関わり方とは違うと判断し、高齢者④との人間関係成立を優先して、高齢者の度重なる依頼に応じたことが面接からわかった。3日目、学生Aは、他の学生の高齢者④への関わりを参考にしながら自立を促す援助ができた。そして、依頼が多かった高齢者④に対する援助が楽しくなり円滑に援助が出来た。

3. 高齢者の食生活行動

1) 学生Dの高齢者⑤氏（以後高齢者⑤）への援助過程

学生Dは、CWから高齢者⑤の食事動作について、右片麻痺があり左手でスプンを使って食事を摂取できるが、口元へ運ぶ時にこぼれてしまうと説明を受けた。また、見守りを中心に食事介助をするように依頼された。学生Dは、CWに促されて箸を用いて高齢者⑤のスプンにきざみ食をのせて摂取を進めた。学生Dは高齢者⑤の食事動作に着目して介助した。学生Dが予測していたよりも高齢者⑤が自分で摂取できたので、学生Dは介助の必要性に疑問を感じた。そして、直接手を出さず、高齢者⑤がスプンですくいやすいように介助をした。学生Dは高齢者⑤が主食のお粥、刻み食の副食を一皿ごとに完食していたため、少しずつ色々な副食を食べよう言葉で促したが返答を返さないまま食事は終了した。学生Dは、カンファレンスに問題を提起し、実習メンバーから助言を得た。学生Dは、実習3日目にはカンファレンスの意見を参考にして高齢者⑤の食事行動の個性を大切に働きかけた。

2) 学生Eの高齢者⑥氏（以後高齢者⑥）への援助

学生Eは、CWから高齢者⑥の食事介助を依頼された。初対面の高齢者で状態がわからず、食事動作に着目して高齢者⑥の状況から全介助が必要だと判断して介助した。学生Eは、高齢者⑥の嚥下状態がわからなかったため、介助では誤嚥しないことを第一に考え、ゆっくりとしたスピードで食事を進めた。学生Eの食事介助で高齢者⑥は誤嚥しなかったが、学生Eが口元へスプンを運ぶタイミングと高齢者⑥の嚥下の間合いがあわなかつ

た。そのため、学生Eは高齢者⑥から終了間際に大声を寄せられ困惑した。学生は、夕方のカンファレンスに問題提起して助言を得た。学生Eは、3日目に高齢者⑥に対してカンファレンスの助言を活かして、嚥下状態に加え表情や動作を観察して、高齢者⑥自身が持っているスプンに食事をのせて摂取を促すことができた。

3) 学生Bの高齢者⑥氏（以後高齢者⑥）への援助過程

学生Bは、急に高齢者⑥の食事介助を依頼され眠っている高齢者のそばに行き、CWと一緒に準備をした。学生Bは、高齢者⑥は覚醒して食事を摂取することが必要だと思ったが、初対面でその人の生活が全くわからなかったため、起こさなければと思いながらも行動に移せなかった。3日目、学生Bは、高齢者⑥の食事動作に着目してすくいやすいように食器の位置と角度を考えて胸元に食器を持って支えた。食事は主食と副食をバランスよく摂取するのが望ましいが、一緒に摂取するためにはご飯の上におかずを乗せて摂取してもらうしか方法がないと判断し介助した。学生Bは高齢者⑥の嚥下機能がどの程度なのか分からないままゆっくりと介助した。学生Bは高齢者⑥が食事をすくっている様子を観察してペースが速い人だとわかり、誤嚥に注意しながら高齢者⑥のペースを大切に介助した。

4) 学生Cの高齢者⑥氏（以後高齢者⑥）への援助過程

学生Cは、初日に高齢者⑥の食事介助をCWから促され介助したが、急に高齢者⑦が興奮状態で叫んだため、驚き戸惑いを感じた。その後学生Cは、その日のカンファレンスで問題を提起し、教員や実習メンバーから助言を得た。最終日、学生Cは、高齢者⑥の食事動作に着目し、高齢者⑥がスプンを用いて食べようとする様子を観察して見守りながら時間をかけて介助を行った結果、昨日まで全介助だった高齢者⑥が、最後までスプンを持ち食事が摂取できた。学生Cは、この体験が嬉しかった。

4. 高齢者の健康的な反応

1) 学生Fの高齢者②氏と⑦氏（以後高齢者②ならびに高齢者⑦）への援助過程

学生Fは、初日に脳梗塞で失語症と構音障害のある高齢者⑦と言語的コミュニケーションを試み

たが困難であったため、そばにいた言語的コミュニケーションがとれる高齢者②に高齢者⑦のことを教えてもらおうとして二人の高齢者に関わった。学生Fは、最終日に前日に参加した施設のレクリエーション活動で高齢者の笑顔やクイズに一生懸命答える様子からレクリエーション活動の効果を知り、遊びに着眼して高齢者と関わった。高齢者②と高齢者⑦を誘い学生Fの3名で百人一首を行った。高齢者達は、テーブルの上に並べた札をとりやすくするため手を伸ばす行動が見られた。学生Fはその場を楽しい雰囲気しようとして百人一首に取り組み、高齢者達もゲームに一喜一憂した。札を多くとった高齢者②が大喜びでCWに報告する様子を見て、学生もうれしく思った。学生は百人一首を集団でおこなったことで高齢者の身体的、精神・社会面で健康的な部分が引き出した。

5. 高齢者の感情

1) 学生Eの高齢者⑧氏（以後高齢者⑧）への援助過程

学生Eは、高齢者の感情に着眼して関わっていた。初日から言語的コミュニケーションがとれて円滑に関わっていた。3日目にCWと高齢者⑧が会話する場面に同席し、高齢者⑧の自宅を処分する話から高齢者⑧の気持ちを推測して大丈夫かなと心配になった。最終日、学生Eは、自宅を整理する目的で外出するために迎えを待っていた高齢者⑧と出会った場面で、「帰る居場所がこの施設しかない」とうつぶさ加減で話す高齢者⑧の話を聞いて聞いていたが仕舞には戸惑った様子で沈黙してしまった。この時の学生Eは、高齢者へどのような言葉を伝えればよいのか困惑し、あいづちをうつのが精一杯だった。その時、そばにいた実習メンバーが、高齢者⑧にいつも通りの様子で、「苑は〇〇さんのお家ですね。」と声かけしたところ高齢者⑧の表情が安らいだ。高齢者⑧の様子を見て学生Eも話題が変わったので少しほっとした。

VI. 考 察

学生の参加観察や面接等から高齢者に対する学生の援助過程における着眼点について5つの類型が抽出された。学生の高齢者への援助過程には、初めて接する高齢者への援助に戸惑いや不安等があり、加えて認知症状から意志疎通が困難である

場合はさらに戸惑いが強くなっていることが考えられる。しかし、実習経過とともに学生自身の生活体験や既習の知識や技術を活用して援助を実施できていた。このため初日、3日目、最終日等の学習過程に沿った適切な教育的支援が必要と考える。そこで、各類型と実習指導について考察する。

1. 高齢者の持てる力

この類型は、初日に戸惑いを感じている状況でもその直後から高齢者に関心を寄せて場面ごとに必要な情報収集を行い、高齢者ができることを見付け支持していた。学生は、常に高齢者に関心が向けられていた。学生は、継続して関わることにより、高齢者の持てる力に気づき働きかけることができたと考える。学生は、5日間の短い実習期間に高齢者の身体面、精神・社会面の持てる力を引き出した援助が行えていた。学生の援助によって高齢者は、いきいきとした療養生活を送ることが出来ていたと考える。この類型の学生に対する実習指導は、戸惑いながらも高齢者のできることを見つけた学生に対し、さらに、学生が高齢者の可能性を信じ、持てる力に働きかけを行えるよう学生の思考を大切に見守り、支援することが重要であると考えられる。

2. 高齢者との人間関係

この類型は、依頼が多い高齢者に対し、高齢者と学生の初日の人間関係に着眼して働きかけていた。学生は、指導者からの助言と高齢者の訴えの間で戸惑いを感じながらも高齢者と学生との初日の人間関係を重視し、援助をおこなった。そして、学生は、3日目に高齢者と円滑な交流を持つ方法が理解できた。実習指導者は、初日の実習指導において、学生が高齢者への援助場面で、指導の内容が理解できていないように見受けられる行動に遭遇する。しかし、指導者は、学生が指導の内容を理解できていないと決めつけるのではなく、学生の行動の意味を確認する指導が必要であると考えられる。このため、この類型の学生に対する実習指導は、行動の意味を確認することにより、学生が高齢者に援助できるように支援することが大切であると考えられる。

3. 高齢者の食生活行動

この類型は、同一高齢者の食事介助場面で食事

動作に着眼して働きかけた援助過程であった。初日は高齢者の食事動作や返答に戸惑いを感じ、適切な食事介助が出来なかった。しかし、学生は、カンファレンスの活用や、食事介助以外の場面での情報を参考にして、次の食事介助の場面で、高齢者の個性を考慮した援助を行っていた。

つまり、初日の学生の食事介助は、戸惑いながらも、実習の事前学習において、高齢者の生活行動に対する援助について学習したことを想起した援助であった。学生は、嚥下・咀嚼状態を観察して、高齢者が誤嚥しないように安全を優先した援助を行っていたと考える。また、学生の関心は、どちらかというと高齢者ではなくて食事を介助する学生自身に向けられていたと考える。しかし、学生は、2回目の食事介助において高齢者の表情や訴え、食事環境に気づくゆとりができ、笑顔で介助ができていたと考える。この類型に対する学生の指導は、カンファレンスにおける学生の発言を引き出し、高齢者の食生活行動について考え、援助の多様性を考える機会を作ることが大切であると考える。

4. 高齢者の健康的反応

この類型は、高齢者の遊びに着目してレクリエーション場面を提供した。そして、2名の高齢者の競争心を高め、高齢者に対して対等に働きかけた援助過程を認めた。これは、学生が、脳卒中や認知症高齢者の健康的な反応を引き出したものであると考える。このような学生の関わりは、治療や検査のない介護老人福祉施設の生活の場に適していると考えられる。今回、面接から、学生は高齢者が楽しめる集団レクリエーション技法を無意識のまま活用して、複数の高齢者の健康な反応を引き出したものであることがわかった。この類型の実習指導は、学生の援助について、カンファレンスなどを活用し意識化することで援助の意味づけを行うことが大切であると考える。

5. 高齢者の感情

この類型は、実習初日、3日目、最終日と同一高齢者に関わっていた。また、この類型は、1)のタイプの持つ力に着目した援助過程の学生と関わった日数は同じであった。しかし、このタイプの学生は、最終日に戸惑いを感じていたことがわかった。学生は、初日から言語的コミュニケーション

ンがとれる高齢者と関わっていた。1)のタイプの持つ力や他のタイプと比較してみると、初日の高齢者に対する戸惑いは認めなかった。しかし、学生は、高齢者との人間関係が進むなかで、次第に高齢者の感情に対して動揺し、最終日に高齢者に対して、戸惑いを見せたと考える。この類型は、実習指導者が、学生の言動から順調に実習しているようにとらえてしまうことが多い。このため、実習が進む中で、学生の思考を確認することが重要である。また、指導者は、学生が実習最終日に戸惑いを感じた場面では、学生に対して、高齢者への思いを表出できる環境を提供し、援助過程を振り返ることが重要であると考えられる。

VII. 結 語

本研究の目的は、介護老人福祉施設に入居する、要介護高齢者に対する看護学生の援助過程における、着眼点を明らかにすることであった。その結果、1) 高齢者の持つ力、2) 高齢者との人間関係、3) 高齢者の生活行動、4) 高齢者の健康的な反応、5) 高齢者の感情の5類型が抽出された。この5類型を活用して教育的支援を行うことが重要であると考えられる。

VIII. 本研究の限界と課題

本研究における対象は、4年制大学の学生、6名であり、学生が関わった高齢者は、1施設の8名であった。このため、学生の高齢者への援助過程における着眼点で明らかになったことは、学生の年齢や、教育課程から偏りがあると考えている。そして、参加観察の時間や場所を限定しているため、観察できなかった学生の高齢者への行動や面接で語られなかった内容があると推測される。今後は、得られた結果を実習指導に活用しながら、引き続き、効果的な指導方法を課題にしたいと考えている。

謝 辞

快く調査協力していただきました実習担当教員、学生、介護老人福祉施設の施設長、実習担当指導者、職員、入居されていた高齢者の皆様に心より御礼を申し上げます。なお本論文は、滋賀医科大学大学院医学系研究科看護学専攻に提出した修士

論文の一部に加筆修正を行ったもので、日本老年看護学会第15回学術集会（2010年、群馬県）において報告しています。

文 献

Cheryl Tatano Beck (1996) : Nursing students' experience caring for cognitively impaired elderly people, *Journal of Advanced Nursing*, 23, 992-998.

千葉真弓, 原田美香, 細田江美 (2008) : 介護老人保健施設での老年看護学実習における学生の学び, *長野県看護大学紀要*, 10, 21-32.

舟島なをみ (2007) : 質的研究への挑戦第2版, 医学書院.

グレッグ美鈴, 麻原きよみ, 横山美江編著 (2008) : よくわかる質的研究の進め方・まとめ方 看護研究のエキスパートをめざして, 医歯薬出版株式会社.

平木尚美, 辻村史子 (2008) : 認知症高齢者との関わりで看護学生が感じた困難と対処行動, *看護・保健科学研究誌*, 8, 1 (通号12).

I. J. オーランド / 稲田八重子訳 (1983) : 看護の探求 ダイナミックな人間関係をもとにした方法, メヂカルフレンド社.

萱間真美 (2007) : 質的研究実践ノート 研究プロセスを進めるclueとポイント, 医学書院.

草地潤子, 千葉京子 (2007) : 老年看護学学習過程における学生の認知症高齢者に対するイメージの変化, *日本赤十字武蔵野短期大学紀要*第20号, 15-24.

黒田裕子, 中木高夫, 小田正枝, 逸見功監訳 (2007) : *バーンズ&グローブ看護研究入門—実施・評価・活用—*, エルゼビア・ジャパン, 577-619.

黒田裕子 (2008) : 黒田裕子の看護研究 step by step 第3版, 学習研究社.

小島通代, 岡部聡子, 金井和子訳 (1998) : ドナ・デイアー 看護研究 ケアの場で行うための方法論, 日本看護協会出版会.

小松光代, 岡山寧子 (2007) : 認知症高齢者とのコミュニケーションに関する海外文献の検討, *京都府立医大看護紀要*, 16, 9-19.

榎本明子, 須田厚子, 田邊美津子 (2007) : 老年看護学実習での高齢者とのコミュニケーションにおける教育課題, *川崎医療短期大学紀要*, (27), 19-24.

松浦均, 西口利文編 (2008) : 観察法・調査的面接法の進め方, ナカニシヤ出版.

松田千登勢, 長畑多代 (2004) : 老年看護学実習における痴呆性高齢者の理解のプロセス, *大阪府立看護大学紀要* 10, (1).

松木光子編集 (2008) : 看護学概論, 看護とは・看護学とは, *ヌーヴェルヒロカワ*, 84-98.

宮地真澄, 大町弥生, 平良陽子 (2006) : 老年看護学実習における学生の高齢者理解—ケーススタディの内容分析から—*藍野学院紀要*, (19), 43-49.

南裕子, 稲岡文昭監修, 粕田孝行編集 (1990) : セルフケア概念と看護実践—Dr.P.R.Underwoodの視点から—, へるす出版.

田中敦子, 鳴海喜代子 (2005) : 認知症高齢者への看護学生の受容的感情とその影響要因に関する縦断的調査, *埼玉県立大学*, 7, 59-66.